

一一 次の文章を読んで後の問い合わせに答えて下さい。

自然保護という言葉を聞くとき、私にはすぐ二つのタイプが思い浮かぶ。わがわい、自然保護に対する考え方はこれ以外にもあるが、本項ではこの二つのタイプに注目してみた。

ひとつは「ねこ、わん、かわいいのがおもしろいよ」という①感情感から生じる自然保護だ。②の場合は「自然」というのは人間の手の入っていない原生林のことだけでなく、③田畠なども含む、人間を取り巻むすべての自然環境を指していると考えていい。そして、われらの自然を「保護する」とは、人間の生存にとって最低限必要なもの、魚などを食料としての資源、災害を防ぐものとしての森林、飲用水としての河川の水質、等々を保護することを目的としている。すなわち、人間生活に欠くことのできない資源および環境を確保するという意味での自然保護だ。

人間の日常的作業によりて生じる環境改変と環境悪化、人間の誕生以降、多くの生物種を絶滅に追いやがってきた最大の張本人だ。約10万年前にアフリカに生まれたホモ・サピエンスが、七万年ほど前にアフリカを出て世界各地へと散らばっていく過程で、大型動物たちはばばたと地上から姿を消していった。人間の狩りによるものである。当時の世界人口はいまの人口の1000分の一以下だったというのに(中略)

人間が、当時は地獄となりていたベーリング陸橋を渡つて、アメリカ大陸へ侵入するなど、マンモスやオオオナマケモノなど、新世界の大形哺乳類はあつというまに絶滅してしまった。それは、たかだか一万年ほど前のことではない。もし人間が南北アメリカ大陸に侵入していないなかつたなら、そこには驚くほどの多様な動物たちが、いまもなお生息していたことだらう。まだ、ニュージーランドに生息していた飛べない巨鳥モアの仲間が、人間に由つてあつというまに食い尽くされてしまった。今日、世界でもうとも美しい国ともいわれるニュージーランドは、じつは外来生物の天国でもある。かつての森で覆われていた丘野は、いまやその多くが④植草地に変わ

り、そいだは、南半球においては、本来人間がいなければ存在していただあるつて自然に比べれば、「く」くかぎられた範囲のもので十分であることを示している。それでも、そいつた最低限必要な自然を保護する」とことで、いまでは、いよいよむずかしい状況になってしまった。最近あたりまえのように聞かれる「H」とか「環境(地球)にやさしい」とかいう言葉は、じつは背景のなかから生まれてきたものだ。「H」も「環境にやさしい」も、自分がち人間が生き残りたいからであり、その点でケンジボタルやオオムラサキなどの保護とは基本的に異なつていて。

告文字の背景には、かなりとつていいほど青空や緑の風景が広がっている。しかし、その背後で企業は、大きな環境悪化をもたらす可能性のある工種を海外に移したり、熱帯の森林を破壊してヤシを植え、そこから得た植物成分を「エニ」と称して原料に使つたり、日本では処分できない産業廃棄物を海外で処分させたりもしてきた。日本だけでも何とかきれいにしようとする努力は賣らが、そのつけをまわされた外国が疲弊するとなれば、それらの国々からの批判も起つて、結局は日本国内での解決方法を模索しなくてはならない。

また、「H」あるいは「環境にやさしい」という言葉を使つとも、まるで人間との生物とが仲良く共存する、おとぎ話的世界が実現可能であるかのように思わせる操作も、たしかに行なわれている。しかし昆虫に関しては、「共生」という關係は、ミツバチやカイロなどと一部を除いては、これまでなかったし、今後も成立しない。人間はこれまでも環境改変によって一方的に昆虫を滅ぼしてきた。そこに共生などという關係ではなく、昆虫は「生き残れる種は生き残つてきた」というのが実態だ。これが昆虫のみならず他のすべての生物についてもあてはまる。(中略)

は「共生なんてできやしないんだ」などいあからざることは、反感を生みだすだろうし、人間が神の「」とお能を持つていて、④人間の「やせこ」やるがによつて、すべての生物が楽しく友好的に暮らしていくと考へるのは気持ちがいい。ただ実際には、人間が生存しつづけるため、「必要なものがいるのライイン」環境にやさしくしてしまつかもしれない。

よう、というのが、した自然保護の実態であると、それに、生物界には本来、生存競争しか存在しないことだけは、やはり認識しておいて、そのための土台自体が崩れてしまつかもしれない。

ところつまり、人間は人間のことだけ考えて生きていくなれない。そして実際いつも人間は人間の都合だけで生きてきた。だから「自然保護」も、その対象が人間に役立つから保護する、人間が生きるために道具として保護するという考え方で一向にかまわない。それで手一杯なのだ。多くの生物種が、人間による環境改変が原因で進行しているといわれる第六回の大絶滅、「新世界の大絶滅」という。これ以前の大絶滅は、大陸移動や火山活動、あるいは隕石の衝突などによつて生じた地球環境の大変動によつて引き起されたときに、によって滅ぼされたのは、「人間が生きやしない」という大前提の前にはしかたのない」とした。といつても、複雑な自然システムのせいではが人間に必要なのか、その見きわめはきわめて必ずかしいのだけれど。

さて、こうした考え方方に立つと、昆虫を含めた生物種のほとんどは滅びていがむを得ない。そして、こうした事態に反対する自然保護もある。そのひとつに④ノスタルジックな感情に基づく自然保護がある(学術的な意味での自然保護とは異なる)。こいつらのほうがより一般的には、自然保護というイメージに合つかもしれない。ケンジボタルやオオムラサキやギフチョウなどの保護は、これにあたる。

人間の本能のなかには、「自分が生き残つてきた環境については、現状維持が好ましい」という指令が含まれている。少なくとも自分がこれまで生きてこられた環境のなかでは、これからも生きのびる人が期待できるからだ。そういう本能を持つた私たち人間が、自分の生存には直接関係ないとはいって、自分の風景の一構成要素であった生物種が滅びていくのを見て、不安を感じるのは無理はない。それはまさに生理的な反応といつてもいい(しかしまた同様な理由で、そつとう種を救うためとほんて、自分たちの生活を大きく変えたのも嫌がるのだが……)。

④の④ノスタルジックな感情からはほんと何を知つてはいけない。

ノスタルジックな感情から生まれてくる自然保護運動は、今日、数がぎりなくある。やつて、この本になぜ保護するのかと問ければ、それ、「そりんな答ふが返つてしまふ。オオムラサキは国蝶である」「生命は大切にしなくてはならない」「滅びてしまふ」と、トントンボやホタルの住む環境の復活あたりまでの話だ。人が豊かな自然といつて、生物種のなかには人間に有用である種もあるかも知れない」等々。しかし本当の理由は、失われていくもののノスタルジーである。

このノスタルジックな感情からは、いくつかの特徴がある。ひとつは、自分の誕生以前の自然は関係ないとどうしただ。けつて自分がいま住んでいる場所を100年前(生命の歴史から見れば、つい先日だ)の巨樹の森に戻そうとは思わない。せひゼンバチやカニムシなどの保護運動が盛り上がりつたことが、「これまでどれほどありうつか。この手の自然保護が色や形、大きさ、話題性などにおいて、きわめて目立つ種を保護する傾向が高い」といふ「証拠」のひとつとてあつていいだらう。

三つ目は、そつした保護を若い世代にも強要するところといふだ。わかりやすくいえば、紙芝居の復活とか、駄菓子屋の復活などによつたものだ。いまの若い世代には彼らなりのノスタルジーがあり、それは彼らの親世代のものとはまったく異なる。その時代錯誤に自然保護運動家は気がつかず、自分たちの主張を正しく信じて疑わないと、してそれは本能として、きわめてまつむつ反応であつたといふのがなんともむずかしい。

この手の自然保護運動家は、ともかくも保護、保護、と叫ぶ人が多い。しかしそれは、保護すべきであると主張する種が本当に「すべての人にとって」重要であるからではけつしてない。ただ、自分が生きてきた環境へのノスタルジーがそろそせていくにすぎない。つてみれば、趣味の世界だ。にもかかわらず、それらの生物を滅ぼしてはいるわけでない。

以上、三つの例を挙げただけにすぎないが、自然保護といつても、その中身はおまけだ。私自身、正直にいえば、せめて昭和30年代あたりの自然にまで戻してほしくと思わなかつた。

しかし、環境破壊の果てにたどり着く未来というものが、いまの私たちから見てたとえどれほどものであつたとしても、その時代に生まれ育つた人間には、さほどのものとは映らないだぶつとも思つてはいる。